

## 要旨

### I 背景

昨今、意思決定支援の重要性が注目されていることで、代理意思決定支援における CNS の役割の示唆、および新人など不慣れな看護師が対応に困惑する遷延性意識障害をもつ人などへの積極的な看護介入に意義を見出すことについて、本事例のプロセスはその実践を通して CNS の役割の示唆を得ると考えた。

### II 研究の目的

筆者が在宅看護分野の実習で関わった遷延性意識障害と診断されている人について、家族が代理意思決定することを支援し、また、本人の QOL の向上を目指した積極的な看護介入を行ったことを振り返り、Shared Decision Making (SDM) の枠組みの視点で整理し考察すること。ならびに振り返りを通して新人看護師が対応に困惑するように反応の少ない在宅療養者に対する専門看護師の役割について示唆を得ること。

### III 研究方法

筆者が実習において関わった 1 事例について、本人と家族に対する看護について記述し、目的に沿って考察を行い、事例研究としてまとめた。

### IV 結果と考察

本事例では、急変時の方針が未定で、チーム間で療養上の目標が共有されていなかった。急変時の方針について、本人の生活史を回顧する家族へのヒアリングと、選択肢の提示と検討のプロセスを持つことで、家族が納得のできる代理意思決定を行えた。その過程を振り返り代理意思決定に事前の準備段階があることが示唆された。また本人の変化を見て家族がケアの意義を見出すことが、療養方針を定めるための倫理調整を果たすきっかけとなった。その結果、多職種チームの協働と、個々人の自律的なケアの創意工夫に繋がった。また、その実践のプロセスは担当看護師への教育的な機会となった。本人の QOL 向上を目指した介入では日々のケアにおいて微細な変化を捉え、五感の刺激や座位の訓練などの介入を行った。その結果、本人の意識レベルの向上、人工呼吸器離脱時間の延長、経口摂取能力の再獲得など意識の回復や生活行動の再獲得ができた。微細な変化への気づきと、本人の可能性を引き出す介入を示すことで、不慣れな新人看護師や関係する人々の戸惑いを解消し自ら考えるきっかけとなると考察した。

### V 結論

代理意思決定支援では、1) 0 ステップの存在、2) 看護師の意見を伝えることの影響、3) 生活史の回顧の重要性について示唆された。CNS の役割として 1) 代理意思決定のステップの導入を可能にする実践、2) 実践を通じた教育、3) ケアの意義を見出す倫理調整、4) 関係者の自律活動を育むことについて見出した。また QOL 向上に向けた積極的な介入は、1) 日常的なケアの中で看護師の観察から始まること、2) ケアの意味を示すことにより、看護師や家族に変化を及ぼすことが示唆された。CNS の 6 つの役割は、それぞれ個別に発揮されるのではなく、実践の中で総合的に発揮することが求められると考えた。